

1. グリアちゃん、ごはんをいただく

毎週金曜日の二十二時。それがオナニー配信者グリアちゃんこと私が、ライブを開始する時間だ。

「やつほー皆ー、聞こえてるー？」

黒マスクで口許を隠した私は今、絨毯の上で膝立ちになっている。正面にあるのは白くて丸い、コーヒーターブル。私はその上にあるノートパソコンに向けて笑いかけながら、手を振っている。

もちろん小首を傾げて。最高に可愛い角度で自分を映すのだ。

「うん、問題無さそうだねー？」

ノートパソコンの横にある縦長のモニター。画面いっぱいに映し出されたウィンドウには、沢山の文字が流れている。

下から上へ、下から上へ――

遠くにいる『視聴者』さん達の言葉が、押し寄せては消えていく。そうして流れるコメントを眺めながら、私は画面の向こう側に居る皆に話しかけていた。

ノートパソコンの画面を確認すれば、画面の中の自分も動く。配信レビューと、設定画面。

最初は難しくて理解するのに手間取ったけれど、一年もやっていれば必然的に慣れた。

私はノートパソコンのモニター上部にあるカメラに向けてにっこり笑いかけ、再び手を振る。

それからもう一度レビュー画面を確認して、見慣れた光景にウンと頷いた。

中央に居る私と、その後ろにある大きなオレンジ色のクッション。クッションは椅子としても利用できる大型のもので——まあ、デ

パートなどに店舗がある例のお店のものだ。

通販サイトのおねだりリストに入れていたら誰かが買ってくれて、無事に届いた。だからありがたく使わせて貰っている。

クッションの後ろにはセミダブルのベッド。

これは引越してきた当時に付き合っていた、悪魔のお兄さんが買ってくれたものだ。

というかこの部屋を一括でまるっと買ってくれた。しかも家具付き。だから家賃はいらない。

いつの間にかいなくなっていたので、たまにどうしてるのかなあと彼のことを思い出す。

滅

だがまあ天使か法律にメツとされていない限りは、どこかで元気に悪さをしていることだろう。

ゴツイ悪魔のお兄さんが買ってくれたものにしては、内装や置い

である小物は白やピンクと、配信映えする可愛らしいものばかり。
私の趣味をよく分かっていらっしやる。ありがたい限りだ。

——さてさて。

軽く雑談をしながら下から上に流れるコメントを読んでいると、
本日の装いに触れている人が多いと気付く。

私は下品になり過ぎないようにと気を付けて笑い、あざとく小首
を傾げてみせた。

「衣装可愛い？あ、似合ってる？えへ、ありがとー♡」

エロいの文字が殆んどである中で、嬉しかったものを拾い上げる。
おっぱいが丸出しの、黒色のセクシーランジェリー。

最初からおっぱいが丸見えなのとすけすけのレースが大変好評な
ようで、買って良かったと嬉しくなった。

「ショーツにはね、えへ♡穴が開いてるの♡♡」

スカート部分を捲ってチラ見せすれば、コメントが沸き立つ。

私は「んふっ♡」と笑って、スカートを元に戻した。

「もうね、濡れちゃってるんだー♡待機してる時ね、我慢できなくてちよっと触っちゃった♡」

エッロ。エロすぎ。挿れたい。

三百人近くの視聴者さん達が、思い思いにコメントを書き込む。

きつと、画面の向こうで自慰をしている人もいるのだろう。

私の空いたお腹は、少しずつではあるが着実に満たされていた。

「えと、それでねー？今日はあ、このバイブを使ってみようと思いまーす♡」

後ろに隠していた極太で凶悪な黒色のバイブをカメラに映したのは、私の尻尾だ。

黒くて艶々のモチモチで、先っぽがハートマークになっている。

ゆらんゆらんと意図して揺らしてカメラに映せば、皆の目が吸い寄せられる。そんな視聴者さん達が大好きな、私の尻尾。

それがとんでもなく凶悪なバイブを持って登場した。

そのことによつて、コメントは更に盛り上がる。

「おもたーい♡こんなの挿れたら、グリア壊れちゃうかもー♡」

尻尾からバイブを両手で受け取った私は、カメラに向けてそれを差し出す。それから顔の横に持つてくると、ツルリとしたソフトシリコン製の幹に頬擦りをした。

『でっつか』『えっぐ』『グリアちゃんがガバガバになっちゃう』
視聴者さんが思い思いにコメントを打っている。

私はそれに「ふふふ」と笑って、彼らを煽るためにチュツ♡と大きな——大きすぎる亀頭に、口付けた。

バイブの直径は五センチ超。全長は持ち手を含めて三十センチも

ある。

届いてから試しに起動してみたが、振動の強さはえげつないものだった。根本付近にあるパールの回転も確認済み。すごかった。

体が丈夫な私じゃなければ、本当に壊れてしまいそうな代物だ。しっかりと充電をして、配信の時間が来るまでずっとウズウズと待っていた。

——フライングで自慰をしてしまったというのも、本当だ。

「ん？もつとよく見たいのー？うふ、いいよっ♡」

『早くぶち込めよ』みたいな失礼な命令コメントは無視して。私はバイブを左手に乗せて、ウェブカメラに映した。

「ここの括れ、えっぐいよねー？」

私はバイブの亀頭の部分を指で撫でて、段差が顕著なカリ首もなぞる。カメラに視線を送りながらペロリと亀頭を舐めれば、途端に

コメントの流れが止まった。

しかしそこにポツンと一つ、可愛いおねだりが届く。命令形でもない、控えめなお願いだ。

「えー？舐めてほしいのー？もー仕方ないなあ♡」

『グリアちゃんがフェラするところ見たい』

それはきつと、ただの眩きだったのだろう。私が応えるとは思っていなかったはずだ。

同じアカウントが、『え？まじ？』と驚きの声を上げている。

私はこういう可愛い視聴者さんが大好きだ。

「んん、んー♡んふっ♡」

舌を出して鈴口のところも、チロチロと舐めてみる。

舌先を尖らせて本来なら小さな穴があるだろう場所をほじくると、画面の向こう側からはドツと精気の波が押し寄せてきた。

コメントも同様に、今ではもの凄い勢いで流れている。早すぎて、目で追うのが大変なくらい。

しかし大体が、自分が愛撫された気分になりきった上での反応だ。ちよつとだけ引くが、ごはん集めが順調なのでにつこりと笑っておく。最後にちゅっ♡と亀頭に口付けると、また沢山の精気が流れ込んできた。

「はい、皆ちゅうもーく♡根本付近をぐるっと囲むように玉が連なっているのが分かるかなー？」

きつと皆、画面の前でシコるのに忙しいのだとは思うけれど。説明は必要だ。

私はウェブカメラにバイブを寄せて、肝心の場所を映す。だが配信用に処理された映像で、きちんと鮮明に見えているかは怪しい。

私は分かりにくいことを想定して、バイブを傾けて角度を変えな

がら、お披露目を続けた。

「ここがね、丁度Gスポットに当たるんだって♡バイブレーション機能だけじゃなくてパールの回転機能もあるから、この玉が回ってGスポをゴリゴリしてくれるの♡」

ツンツンと玉をつつきながら説明すれば、またコメントが沸き立つ。待ち切れなくて文句を言っていた人達も一旦止まり、それからまた吹き出すように急かす言葉を流し始めた。

「うふふ、挿れるの楽しみ♡いっぱいイきたいなあ♡」

またバイブに頬擦りをして口付けながら。私は煽るようなことを言って、更に視聴者さん達の興奮を高めた。

そうするとまた画面越しにじわじわと精気が集まって、私はその甘い味わいにニコリと笑みを深める。

頭に小さな黒い角があって、尾てい骨からは尻尾が生えていて。

下腹部には、桃色に発光する淫紋。

その特徴を聞けば十人中が十人、サキユバスだと理解することだろう。

もちろん私は、そんなサキユバスだ。

人型の雄の精気と精液をごはんにしている。

精気というのは、生物が興奮した時や性感を高めた時に放つものだ。例え遠くにいても、自分に向けられたものであれば微かに感じ取れる。

そして例えそれがインターネットであっても、繋がりを得ていれば——ほんの少しだけ吸収効率が上がるのだ。

直で食べるのに比べたら、圧倒的に効率は悪いのだけれど。

それでもこのやり方なら、わざわざ相手を見つける必要はない。

そしてトラブルに巻き込まれる心配も、ないのだ。

（つい最近、妻帯者と関係を持ったサキュバスが訴えられたという話も聞いたし……）

そうとは知らずにご飯を貰って、後日青褪めることになるなんて絶対に嫌だ。だから私は、このやり方が気に入っている。

本当は——待ってるのかも、しれないけれど。

気紛れな悪魔が帰ってくる確証などないのに。

（……あー美味しい！やっぱ配信って最高ね！）

変なことを考えそうになっていた私は、無理矢理気持ちを切り替えた。配信の良いところはファンに好きだと思ってもらえて、そうすればよりお腹が膨れることだ。

自分に向けられる感情だって、サキュバスにとっては立派なごほうびである。それもあってお世話になっている成人向けライブ配信サイト様には、本当に感謝していた。

「んっしょ♡はーい、おまたせ♡」

視聴者さん達を煽るだけ煽って満足した私は、後ろに下がっていつもの定位置についた。

大きなクッションに凭れてウェブカメラを見つめる。

「みんな♡グリアちゃんのおまんこだよー♡」

私はM字に足を開くと、ショーツの穴を両手で横に広げた。

パツクリと開いた亀裂。濡れそぼった女性器がカメラに映る。

サキュバスのおまんこはどんなに酷使してもキツキツで、淡い桃色をしている。

私はしっかりとそれを見せ付けて、にっこりと微笑んだ。

「おっきいバイブが待ち切れなくて、ヒクヒク♡♡ってしてるでしょ？」

コメントを映す用のモニターは、ここからでも良く見える。

皆とつても、興奮しているみたいだ。

ホントか嘘か、ちよつと出たと言っている人もいる。

「んー、我慢できないからあ、もう挿れちゃおっかな？」

いつもはまず指で慣らすところから始めるのだが――

この凶悪なバイブの実物を目にしてからというものの、私はずつとムラついていた。配達で届いた昼過ぎから、ずっとだ。

進行上の都合で隠しているが、本当にもう限界。今すぐぶち込みたい。

――そしてこんな時ほど失礼な命令コメントが目につき、被虐心が刺激されてゾクゾクとするのである。

「あ……っ♡さきっぽ、おっきい……♡」

ぬる、ぬるっ♡ぐちっ、にゅぐっ♡

私はバイブの先端で秘裂を上下に擦り、溢れ出した蜜でバイブを

濡らしていった。

クリトリスもこりゆこりゆ♡と擦って、じんわりとした快感にほ
うっと息を吐く。まだひんやりと冷たいバイブではあるが、その内
私の体温が移るはずだ。

——にゆぐっ、ぐぶっ♡

「んんっ♡おっき、すぎっ♡」

我慢できなくて切っ先を入り口に突き立てるが、大きすぎてすん
なりと入らなかった。蜜口は特大の亀頭を半分ほど咥えて、縁が大
きく引き伸ばされている。

「はーっ、はーっ♡やだ、いれ、る……っ♡」

せっかく咥え込もうとしているのに、ここから引き返すのは我慢
ならないと——

私は持ち手を掴む手に力を込め、バイブを力強く引き寄せた。

——グボツ！ずにゆるるるっ♡

「——おっ♡おっ♡おーッ♡♡♡」

無理矢理振じ込んだバイブが、物凄い勢いで蜜道を踏み荒らししていく。ごりゆりゆっ！ぐちゅちゅちゅ！とめちやくちやに内壁を擦られた私は、「おッ♡♡」と鳴いてガクンッ♡と体を跳ねさせて。呆然と天井を見つめた。

「おっお、おっ♡」

ヒクヒクと、蜜道が戦慄している。軽く達してしまったと心の中で呟いて、私はもう一度腰を跳ねさせた。

「あッ♡あッ♡しゅごっ♡」

先端をグリグリと行き止まりに押し付けて、Gスポットを圧迫するようにバイブを持ち上げる。

その上でゴリゴリと内壁を苛烈に擦り上げれば、あっという間に何も考えられなくなった。

ぐちゅっ♡ぐちゅっ♡ぶちゅっ♡どちゅっ♡

「あ、あ、あっ♡きもちっ♡きもちいっ！」

ゴツゴツとポルチオを突き上げながら、容赦なく内壁を擦る。

剛直は振動などしていなくとも、大き過ぎるからそれだけで気持ち良かった。

私は腰をカクカクと震わせながら両手でバイブを掴み、夢中で自分打ちつけた。

「あっ！あッ！イグッ！もう、イツ、ぐーッ！」

どちゅどちゅどちゅっ♡ごちゅごちゅごちゅっ♡

がむしやらに隘路を蹂躪し、強すぎるくらいに子宮を突き上げる。その上で私は左手を使って淫紋がある場所——つまりは子宮の上

を、グリグリと押していた。

ぐぢゅぐぢゅぐぢゅっ♡どちゅ……っ！

「あッ、いッ、いんん〜ッ!!♡♡♡」

目を閉じて淫らに腰を振り、全力でおまんこを耕す。

そうして私は自分が配信中であることも忘れて、思いっきり好きなように達した。

「あ——あっ♡あ、あぁー……♡♡」

太いつてすごい。最高に気持ちがよかった。

でももつとほしい。こんなじゃ足りない。

お腹もちよつとずつ膨れているし、このままあと三回はバイブで

イッて——

（んっ？お腹が膨れてる??）

あれっ、と正気に戻った私は、閉じていた目を開けて正面を見た。

コーヒーターブルの上にあるノートパソコンと、縦長のモニター。ノートパソコンに映っているのは配信画面で、横のモニターでは沢山の文字が流れている。

「あ。……あはっ♡皆ごめん♡一人で楽しんじゃった♡」

私はカメラに向けて、えへっと誤魔化すように笑った。

すると視聴者さんからあれこれと反応が返ってきて、私はまたえへへと笑う。

「うんっ♡これ、すごいよ♡めっちゃくちやおっきいから、……おッ♡」

どんなに凄いかを実演して見せようと。そう思って持ち手を掴んで動かせば、太過ぎる幹でごりゅっ♡ずりゅっ♡と内壁が擦れた。こうなるともう、私の手は止まらない。だって圧迫感と快感が直結しているせいで、気持ち良くて仕方がないのだ。

ぐちゅっ♡ずりゅっ♡ぐちゅっ♡

「っ、はあ……っ♡あーん、きもちい♡」

一度思いつきり達した後だから、少し余裕が出来た。

だから私はバイブを前後させて自分を犯しながら、ウェブカメラに向けてペロリと唇を舐めて見せる。

その上でいやらしく腰をくねらせれば、コメントが流れる速度が上がった。精気も順調に集まっている。

ぐちゅっ♡ぐぶっ♡ズルッ♡ぐちゅっ♡

「おく、までえ……♡入れ……あっ♡ハッ、あ、あ……っ♡」
意識して視聴者さんを煽って。

下品な言葉が並ぶコメント欄にゾクゾクとしていたはずが、バイブの質量のせいで早くもそれどころではなくなってきた。

「ふっ♡おおっ♡お、ふうっ♡」

私はごっちゅごっちゅ♡と奥を突き、押し付けた幹でGスポットをゴリゴリ♡と挟む。

ああ、気持ちがいい。もっともっこの穴を犯したい。

「んん、やり、にくい……♡」

バイブやデイルドを使うとき、最初は座ったままでやっても——私はつい、体勢を変えてしまう。

しゃがみこんで、下からズブズブと出し入れするのだ。

今回もそうしようとしゃがみ込めば、私の癖を知っている常連さん達がヒートアップしてコメントを連投していた。

——ズ、りゅう……♡

「お……♡♡」

私は下から包み込むように持ち手を握って、極太の杭を根本まで押し込んだ。ゴチュツ♡と先端が行き止まりにブチ当たり、ゾクゾ

クと腰が震える。

「あ、ふ、かあ……♡」

体勢を変えたことによって、さっきよりも深く犯されている。それでも私は最奥にグリグリとバイブを押し付け、腰を揺らしていた。見せるために自分を犯していたはずが、また感じることにしか考えられなくなつて。カメラに顔を向けたまま、目を閉じる。

「おっき……♡すご、おっきいい♡♡」

ぐちぐちぐちっ♡ぐちゅうっ♡

嬌声を口から溢しながら、私はバイブの取っ手を円を描くように動かした。腰も揺れ続けているが、ご愛嬌だ。

ごちゅっ♡ごちゅっ♡ぶちゅっ♡

「あ……♡奥、しゅきい……♡♡♡」

集中的に奥を突き上げて、外からまた子宮をグリグリ押す。

気持ち良すぎて本当に手が止まらない。

多少強引に踏み荒らしてもサキュバスの体は感じるだけなので、私はがむしやらに自分へ杭を打ち続けた。

「あッ！あッ！おちんぽしゅきっ♡ バイブおちんぽだいしゅき
いっ！」

ゴツゴツゴンゴンと先端でポルチオを叩き、皮膚の上からも子宮を圧迫して更にいじめる。

気持ち良すぎて細かく何度も達しているが、そんなのは関係無い。
「もっと♡ もっと♡ おまんこめちやくちやに、するのおっ♡♡」
脳内では逞しい雄にめちやくちやに犯されていることを想像しながら、私は自分自身を責め立てる。

サキュバスの胎はひしやげながらも、精を受け止めることを心待ちにしていた。

しかし今全力で犯してくれているのは、精を吐き出さない無機物だ。どんなに締め付けて奉仕しても、望むものは与えられない。

「うう、うーっ♡せつ、ないっ♡♡」

この食事方法は便利な反面、毎回確かなフラストレーションを生む。それでも都合が良いからとこの方法をとっているが、たまには生身の男から搾精した方がいいかもしれない。

けれど今すぐにどうにか出来るわけではないので。

取り急ぎ強い快感で誤魔化すため、私は手探りでバイブの凹んでいる箇所を探した。

そして見つけたその場所を指先でググツと押し込む。

ブブブブツ♡ブブブーッ♡

「……おお、おっ♡」

カチリと音が鳴って長押し三秒。それからブルブルと、バイブの

先端が震え出した。

密着しているポルチオに強かな振動が当たり、子宮にも響く。

ブブブブ——♡

「ふっ、くう……っ♡♡うう、あッ♡♡」

お腹の奥で、強烈な快感が渦巻いている。

まるで外に飛び出て弾けようとするかのように、悦楽がグツグツと煮立っては体が限界に達していた。

「もっ、どおお……♡♡♡♡」

激しく震えるバイブでゴツゴツと最奥をノックして、何度も絶頂を重ねながら——

快感と欲望に脳を灼かれた私は、親指でもう一つのボタンを探し当てる。そこをまたグツと押し込んで長押しすれば、バイブレーションとは違う駆動音が鳴り始めた。

「あ、あつ、あッ！しゅごっ♡♡お、しゅ、ごおっ♡♡♡」

ブブブブ…♡ウィンウィン♡ブブブブッ！

ポルチオに口付けている先端が、おまんこの深部に深刻な振動を与えて。丁度Gスポットが触れている箇所が、グルングルンと素早く回転している。

特の感じる場所二点を強かに責められて、私は大きく口を開けたまま体を硬直させた。

ブブブッ♡ぐちぢぢっ♡ごりゅごりゅっ！

「あえっ♡おッ♡♡きもちっ♡Gしゅぽ、ゴリゴリされるうっ♡♡♡」

バイブをグッと上に持ち上げると、Gスポットがより苛烈に擦れる。私はしゃがみ込んだ体勢のまま腰を前に突き出し、後ろにあるクッションに左手を突いた。

ごりゅごりゅ♡ごりゅりゅりゅ♡ブブブ♡

「ああッ！アッ！すごっ♡これ、すごいよおっ♡♡」

実のところは最初に少し演技をして、多少大袈裟に感じているフリをしようと思っていた。

けれど実際このバイブを咥え込むと、あまりにもピンポイントで良いところを抉られ過ぎて、本気で感じてしまう。

「じ、じーしゅぽ♡♡しゅご、ことに、なつてりゅ♡♡あ、あ、やっ！いつ、くう……！」

もう既に数回達した後ではあるのだが——いつもより圧倒的に、いくのが早い。

ガクガクと腰は痙攣しているし、頭の中は真っ白だ。

「あっ、イクッ！あ、ああ〜♡♡」

一瞬だけ耐えようとしたが、失敗して。

私は極太のバイブをぎゅうぎゅうと締め付けて、盛大に達した。

「あ、ハッ♡らめ、とめるっ！」

——カチリ。私は慌てて電源を切って、バイブの駆動を止めた。力が抜けて後ろに倒れ込むと柔らかな感触が受け止めてくれる。そうしてクッションに凭れたまま、私は暫し呆然としていた。

『は？何で止めたの？』『えー連続でイッてよー』『すっげーエロかった。もっとして』

ぼんやりと眺めるモニターの中で、皆が好き勝手に感想を述べている。

いつもより視聴者さんが多い。だからかほんのりと空腹が癒されて、達したことによって淡く発光している淫紋が鮮やかさを増した。「……あ、ごめんねー。すっごく良かったから、ちよつとぼおっとしてた……」

次第に心配の声が増えつつあるコメントに言葉を返し、私は体を起こした。

それから再びしゃがみ込んで、埋まったままの杭の根本を掴む。

「もう、一回……」

また親指で感触を探って、ボタンを探す。

そうして指先で感じた凹みをグツと押し込んで――

「んっ♡♡♡」

カチリ、と鳴った後にバイブは震え出した。

ブブブブツ♡ブブブブツ♡

「ん、ン〜っ♡♡ハッ、ハッ、これ、すごすぎっ♡♡」

特大サイズだから、膣内が限界まで引き伸ばされてブルブルされている。どこもかしこもイイところが刺激されて、子宮すらも気持ちが良い。

ぐぢゅっ♡ぐぢゅっ♡

「うううっ♡♡♡」

画面の向こうから注がれる熱視線を確かに感じ取りながら、私は自分で自分の性感帯を嬲っていた。

回転スイッチを入れないのは、あまりにも気持ち良すぎるからだ。チラチラと確認しているコメントではそれをひよっていると揶揄されているが、無理なものは無理だ。仕方がない。

ず……りゅっ♡ぐぢゅっ♡ぐぶっ♡

「あ、うーっ♡すぐ、いき、そおっ♡♡」

私はバイブの取っ手を両手で掴んで、グポグポと穴を擦っていた。しかしミチミチの隘路が激しく抉られるせいで度々手が止まる。

「だってえ……っ♡ほんとに、すごいんたっ♡お、おっ♡」

もっと速くして。もっと激しくして。いくとこ見たい。次は三回

いくまで止めないで――

視聴者さん達の要求が、絶えず流れている。

ごちゅっ♡ぐちゅっ♡グッ、グッ♡

「あ、は、おっおっ♡ぎもぢい……っ♡♡あ、ふっ♡」
本格的に気持ちが良くなってきた。

私はつい、カチリと回転スイッチを押してしまった。

本能に忠実なサキュバスは、思い立ったら即行動タイプなのだ。

「あゝあゝーッ！あゝーッ！」

ギュインギュインとバイブのパール部分が回転し、丸い玉が容赦なくGスポットを抉る。

私は自分が即座に達してしまいそうな気配を察し、慌てて左手を動かした。クッションの下を探り、そこにあるだろう物を探す。

「あッ！あッ！あう、……ヒッ♡」

早く早くと焦って見つけ出した固い感触。それを左手でガツシリと掴み、私はその先端を割れ目の上に当てた。

そうしてその道具——電マのスイッチを入れた。

ブブブブツ♡ぐちちちっ♡

「——ッ!! おおお……!」

電マにクリトリスを激しく揺さぶられる私は、右手でバイブを必死に動かしてぢゅこぢゅこと膣内を擦り上げる。

更にはバイブを持ち上げると強く膣壁上部に押し当てて、Gスポットをゴリゴリと集中的に抉った。

それからゴツゴツと子宮を殴り、腰も揺らす。

ブブブツ♡ぢゅぼぢゅぼっ♡ゴリユツ!ゴリユツ!

「お、おおお……っ! イッ、ぐうーっ!」

電マを揺らし、ゴリゴリと捻り潰したクリトリスを擦る。

膣内は激しく擦りすぎて泡立ち、Gスポットは興奮から膨れ上がって、執拗にパールで磨かれていた。

思考を全て快楽が塗り潰している。私は蕩けた蜜壺を追い立てられるような激しさで、ひたすら責め続けた。

ぐちゅぐちゅ、ぼちゅぼちゅっ！ブブブツ、ブブツ♡

「ん、んうゝゝ……っ!!」

思わずピュツ♡と潮を吹く。そしてそれを皮切りに、私は重くて深い絶頂に、飲み込まれていった。

「あッ！まら、イぐっ！手、とまんにやいつ♡あ、あッ！いぐうっ♡イグイグツ♡♡♡」

イッている最中にも勝手に手が動いて。潤み切った穴をごりゅごりゅぼちゅぼちゅどちゅどちゅと征服していた。

激しく押し上げられるポルチオはあまりの快感に打ち震え、小さ

な口からトロリと特濃の蜜を溢す。

サキュバスの、催淫効果付きの愛液。本来は男性の性器を射精に導き、精液の生産を手伝うものだが——今の相手は玩具だ。

どんなにガン突きしてほしいくても、自分で動かして、自分で突くしかない。

ごちゅっ♡ごちゅっ！ぶちゅっ♡ぐちゅぐちゅっ♡

「いいいいっ♡あ、おおお……♡イツ、ぐうう……♡♡♡」

つい手が滑って、バイブも回転も強さを上げてしまった。

お陰で私は穴の中はゼーんぶが狂いそうなほど気持ちが良くって。

私はおほっ♡なんて鳴きながら、全力で達した。

そうして深く達した後、脱力してクッションに倒れ込み、尻餅をつく。そんな不格好な体勢のまま、私は駆動し続ける玩具に責められ続けていた。

左手に持ったままの電マはクリトリスから離れたが、振動を続けている。

「あ、あ……、あ……とめ……」

バイブを止めなきやと思うのに、体に力が入らない。自然に抜けることを願うが、とにかく大きくてピッタリと埋まっている。

「はっ、はあっ、はあ……っ！」

ウインウインと音を立てながら回転し続けるパールが、Gスポットを挟り続けている。

ポルチオにピッタリと密着している先端は、ブブブブ♡と絶えず子宮に振動を与えていた。

「いつ、く……♡」

マイクが拾いそうにもない小声で——私は絶頂を申告した。

「あ——お、お……♡」

全身を覆い尽くすような強大な衝撃に襲われても——バイブからの刺激は止まない。

とうとういきすぎて限界を迎えた私は、絨毯の上にシヨワシヨワと失禁をしてしまった。

顔を伏せてビクビクと体を痙攣させ、口から小さく嬌声を洩らす。ブレる視界にたまに映るコメント欄は、皆片手を動かすのに忙しいのか——却って流れが緩やかになっていた。

「あ、んあ、あ……っ」

どうにか力を振り絞って、私はバイブの電源を切った。続いて左手でも電マの電源を切り、絨毯の上に置く。

「あ、ううーっ♡♡」

私はくたりと脱力して、クッションに体重を預ける。

右に向けた体を丸めてこめかみを擦り付けるが——落ち着かない。

バイブが大きすぎて、挿っているだけで気持ちが良いのだ。

でも今はまんじりとも動けない。

眠気が襲いかかってきていて、今すぐにも眠ってしまいそうだ。

「んん、ん……」

いっぱい達したから疲れているが、スッキリとした爽快感もある。お腹も満腹とまではいかないが膨れていて、満たされていた。

だから私は余計にウトウトとして。配信中だと言うのに、そのまま眠ってしまった。

眠り落ちる寸前にどうにかバイブを抜いたが、それをどこにおいたかまでは覚えていない。